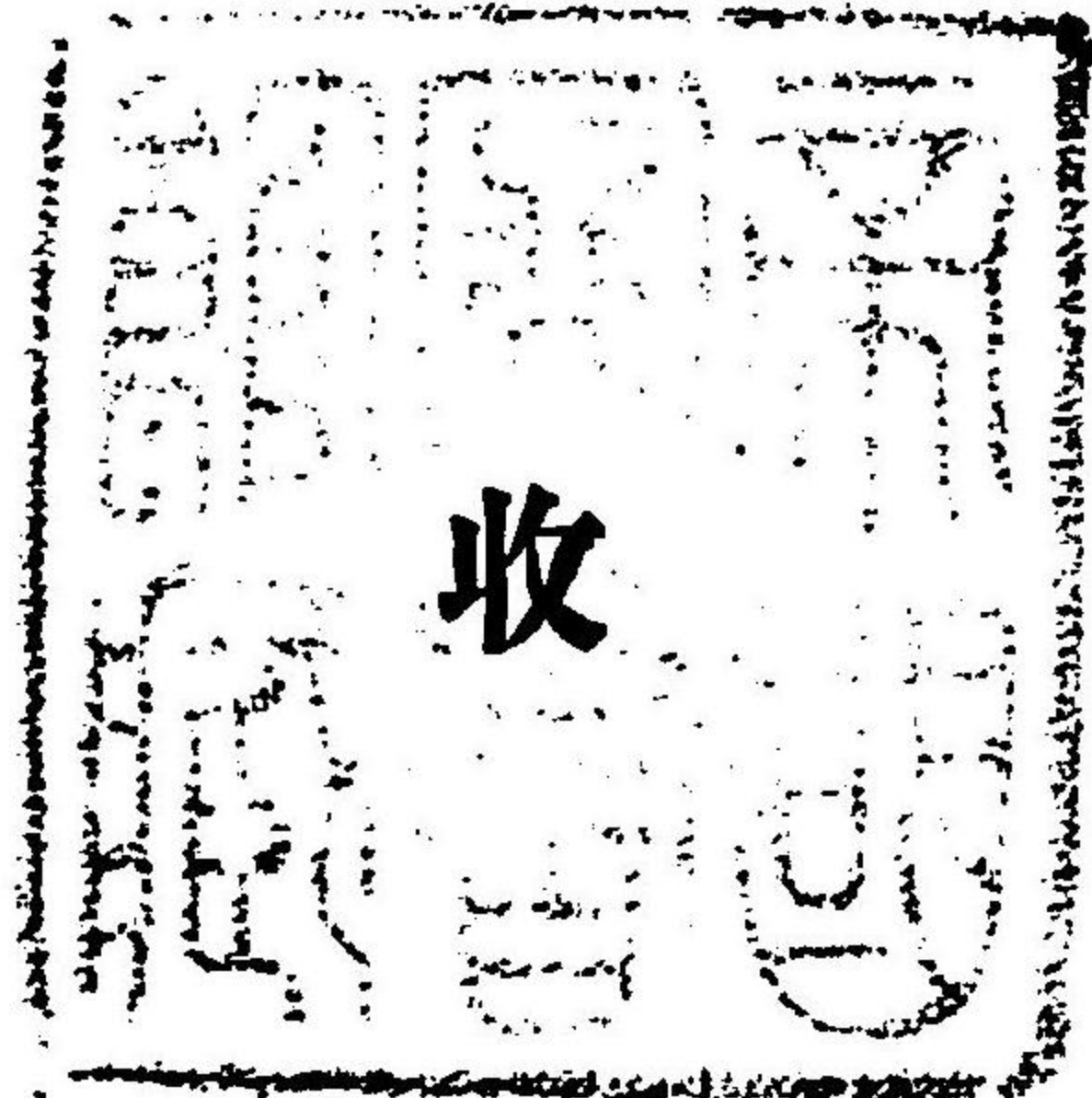


特22  
35



穫

前田  
夕暮



## 自序

我が第一歌集を「收穫」と名づく。

一體去年の秋出すつもりで、略原稿を纏めた時、いろいろ名づくべき標題を考へた末、「歌はわが若き日の收穫なり」といふことに思ひ及び、そのまま收穫を標題とすることにした。それから四五日して島崎藤村氏の處に行くと、氏も短編集の名を收穫としやうと思つてゐたといふ話があつた。私はその話をきいて悪いことをしたやうな氣がした。そこで早速私の歌集の名は更めて、新らしく氏に名づけていたゞくことにした。氏は自分の詩の中からでもよい標題をみつけてあげやうといふ大變親切なお言葉だつた。それから原稿をすっかり纏めて、一塵めていたゞいた上、序を書いて貰ふ筈になつてゐた。

すると数日後、氏から一葉の端書が来て、「私の短篇集は外の標題にしたから、君のはもとのまゝの收穫で出すことにしてくれ」といふやうな意味の文面であつた。

其儘になつてそれから半歳すぎた。

今度いよいよ出すことになつて標題を考へたがなかく思ふやうな名が思ひつかぬ。矢張り「歌はわが若き日の收穫なり」といふ一句が頭に残つてゐる。其處で、藤村氏からあゝいふ端書も來てゐることであり、氏の短篇集は「藤村集」として此一月出てゐるので、却てもとのまゝがよからうと、人も言つてくれるし、自分もさう思つたので矢張り「收穫」と名づけて出すことにした。

「收穫」は便宜上、上下の二巻に分けた。上巻には比較的新しく歌を、下巻には割合に古い歌を収めた。古い歌と言つても四十年の後半期の歌が一番古いので、大體は四十一年及び四十二年、二年間の作の中より、比較的拙くとも

正直に歌つてゐるやうなもののみを輯めることにした。尤も、本年になつて作つたのも少しは入つてゐる。

四十年の作は兎に角、四十一、二年間の作はすべて二千首以上上つてゐた。此二千首以上の中から六百首以内の歌を撰抜した。撰抜する時、私は矢張り舊稿へ墨を引いた。二三百首を利して悉く抹殺した。然し二度目に見かへした時、そのうちの二三百首を活かざるを得なかつた。最初は拙い歌を多く抹殺した。二度目には拙くとも正直な歌を活かした。

自分は技巧が拙い、修飾することを知らぬ。藝がない。であるから、思つたこと感じたことは、思つたこと感じたこと以上に歌ふことを知らぬ。唯正直に歌へたらよいと思つてゐる。自分は無論藝術を尊重する。愛する。然し自分は何時も通例人であらんことを願ふ。唯一箇の人間であつたらそれでよいと思ふ。通例人の思つたこと、感じたことを修飾せず、誇張せず、正直に歌ひたい

收穫 上 卷

と思ふ。

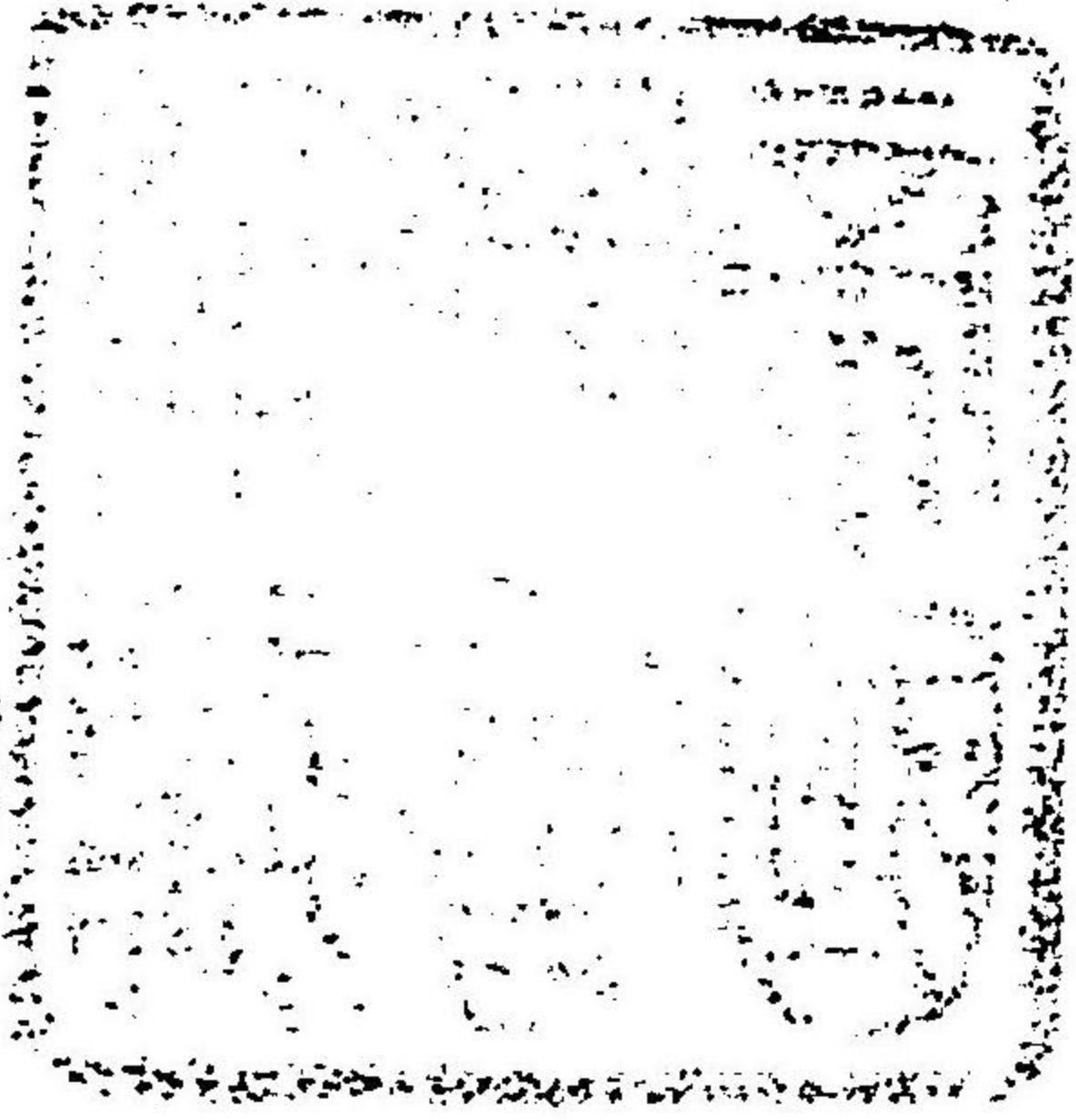
吾等は藝園の私生児たることを厭はぬ。唯眞實でありたい。

終りに、本書の出版につき、種々盡力していただいた水野葉舟君の厚意を謝す。

明治四十三年

三月九日夜

著 者



魂たましひよいづくへ行くや見のこししうら若き  
日の夢に別れて

荒みゆく心をしづにおししづめ「吾」をみま  
もり涙ぐまれぬ

あはれみが二人をつなぐ悲しさをいかな  
る時に君は知りしや

別れ来て晩夏の野に草を踏き少女のごと  
くひとりかなしむ

われ等また馴るるに早き世の常のさびし  
き戀に終らむとする

襟裾のつきし袷と古帽子宿をいで行くさ  
びしき男

泣くひまに裁縫などする君ならずおしる  
いの香を悲しがるかな

秋の朝卓の上なる食器らにうすら冷たき  
悲しみぞ這ふ

何物か胃に停滞しあるがごとと思はるる目  
の果敢なき心地

信じられぬ男のもてるなげきなどなき人  
とのみ君おもふらむ

わすれ行きし女の貝の襟止のしろう光れ  
る初秋の朝

すてなむと思ひきはめし男の眼しづかに  
すむを君いかにみる

やや古き壘の上にはらばれる十月の日の  
なかに横臥す

白き額にのこし來にけるわが熱き唇おも  
ひ夜の街ゆく

今朝もまた頭なやみて心倦むわづかにわ  
れといふ意識あり

垢づける蒲團の上におほひなる蟲の如く  
もまろびねにけり

空虚なるちからなき胃とつかれたる頭を  
はこび日の街をゆく

君まどひおそれわななぎすすりなく葉す  
れの音の水の如き夜

をりをりは別ればなしもまじる夜の氣ま  
ぐれ心こほろぎをきく

秋の晝名しらぬ花をみてありぬ唇うすき  
子の戀ひしさに

わが前に甘き愁を眼にみせし誘惑ぞある  
あはれ女よ

君ねむるあはれ女の魂のなげいだされし  
うつくしさかな

いはれなく君を捨てなむ別れなむ旅役者  
にもまじていなむ

マチすりて淋しき心なぐさめぬ慰めかね  
し秋のたそがれ

いづくにか捨てむとすれど甲斐ぞなき誇  
らひに似し我が悲しみを

荒みゆく我れのこころをいかむともなし  
えで秋に行きあひにけり



うら若き日の悲しみに別れ来て塵とおなじき身となりにけり

さいはひに思はるる身は倦みはてぬ小鳥よ來啼け日光の中

低能兒あかただれたる夕空の下にうたへるその黄なる顔

輻ひろき醜きそびら何物のそびらとしらすうす暗にみゆ

暖きあかるき底へ沈みゆくちづけられし若きたましひ

なにとなくそらさむとする冷たき眼なにごとぞふと行きあひにけり

めさむれば秋雨のふる朝なりきうすあたたかき悲しみのこる

物につとつきあたりたる思ひしつ二人をつなぐ悲しき力

なにごとぞわかき女の魂の彼方に退きて  
われをみまもる

かへりゆく人の脊をみて我れひとり君を  
久しく停車場にまつ

あたたかき血潮のなかにながれたる命戀  
しき日となりにけり

夕されば風吹けば木の葉散りくればうす  
唇のなつかしき子よ

秋の夜のつめたき床にめざめけり孤獨は  
水の如くしたしむ

かへり行く女よ汝が肩あげのさびしきあ  
とにほこりうくみゆ

つつましく彼の若き日の歡樂にいとおと  
なしう別れきにけり

菊のにはひむさぼり吸ひぬ晩秋の日光の  
なかのさびしき男

わかれ来て飢えし悲しき野の獣けものの  
如く秋草にぬる

崖上の秋の梢をみてありぬ別れしあとの  
午後のひととき

悲しみに別れ涙に別れ來し心のくまを木  
枯のふく

冬の朝まづしき宿の味噌汁のほひとと  
もにおさいでにけり

受話器とるあまりにとほき海の音の君が  
言葉にまじるこちし

吸殻の白くたふれし秋の夜の火鉢にもた  
れ風の音さく

秋の宵机の上の白菊のほひをやかくわ  
かれしをんな

うつりゆく女の心しづやかにながめて秋  
をひとりあるかな

つかれたる皮膚にしづかにこほろぎのね  
のひびくなり獨りねの夜

女ゆゑねたむは常といひながら君あまり  
にもはしたなきかな

こなたみつつそのまま街のくらやみに没  
しゆさける黒き牛の顔

やすらかに汝が夫を愛せよといひやりし  
より二秋をへぬ

黄ばみたる桑畑の上に晝の富士ながめて  
ひとり口笛を吹く

またしてもわがままゆるゑの嫉みごとほと  
んど君に困じはてける

なまぬるき君が情のなかに生き幸なりし  
ひとときもあり

うらかなし歸りて君が父の前いふいひわ  
けのおぼつかなさも

屋根上を風さわぎ行く崖下のつめたき家  
に石の如くぬる

野木ひともと梢あかるう暮れのこるあひ  
びきの子の唇を吹く風

曇天をとほくくまどる町あかり冬近き夜  
の窓にひとりみる

あくびをばこらへてわれをつつましうま  
もれる君といかで思はむ

赤茶けし帽子ひとつに悲しみをあつめし  
ごときささびしき男

黄に枯れしものの蔓などからみたる断層  
面をあふぐ冬の朝

おもふままなすべきことをなし果てし後  
の心のさびしくありけり

煤烟の低うながるる街を行く眠不足のつ  
かれし瞳

うす暗き校正室の北窓にもたれて夜をま  
つ男あり

何物にか踏みにじられしあとに似て自棄  
の心のやるよしもなし

あやまちて切りし小指を冬の夜の灯のも  
とにみるさむさかな

うら枯れし一面の野に降りそそぐ日光を  
みるひとびとのかほ

ほこり浮く校正室の大机ものうき顔の三  
つ四つならぶ

傷きし小指のさきに冬の夜のつめたさ感  
じふとめざめけり

停車場をいづればほこり額をうつつかれ  
し心わびしかりけり

あわただしく悔いし男の悔いて後心さび  
しき空虚の一日

冬の午後磯山にねて砂をかむ犬をあはれ  
む別れしころ

うすにごる初冬の海にふりそそぐ日光を  
みて物をおもへり

うたたねよりさむれば太く汽笛鳴く春を  
ながるる曉のさむさかな

油つきしランプの下にうづくまりけもの  
の如くいぎたなくぬる

昨宵のままとりちらされしあかつきの座  
敷の隅に物をおもへり

あがなひし命の愛のおぼつかなあたひ乏  
しくなり行かむとす

くちづけを忘れし人はさびしげに一人裁  
縫の針はこぶかな

木に花咲き君わが妻とならむ日の四月な  
かなか遠くもあるかな

君かへりし後のつめたき崖下の家に落葉  
の音ふけにけり

あやまちし來しかた君を傷けし來しかた  
をして葬らしめよ

あたたかきかかる思ひを君來たる午後ま  
でいかに守りてあらむ

わがままはすまじと昨日ちかひしを忘れ  
し人の憎からぬかな

いくたびか君をあやまち傷けしそのはて  
にして別れむとする

君かへる夜の電車のあかるさを心さびし  
くおもひうかべつ

わがふるさと相摸に君とかへる日の春近  
うして水仙の咲く

君つれて君も知るなる人妻の初戀人の郷  
里へかへらむ



わがままの心おさへて二人ありみじかき  
冬の口もくれにけり

すこやけき汝がうらわかき眼の色につつ  
まれてあるわれなつかしむ

いかならむものを二人にもち來たす四月  
の空のうらなつかしさ

君をつつむあかるき光幸に妻となる日を  
いかにまつらむ

感觸かんじよくになれし手ながらとらざればさびし  
かくしにむが手冷えたり

君泣かばとおもふときに君泣かず言葉す  
くなに物纏ひてあり

心やすくなりけり遠く活字刷る機械の音  
にわかれかへりて

うすら冷たく軟かなりし感觸かんじよくの胸のあた  
りにのこる心地す

投げいだせし手につたひくる冬の夜の冷  
たさにふと君おもひいづ

冬の夜の街路をいそぐ旅人の俤のあとを  
われも走らむ

ひとりねむる君が肌の香に久にわかれし  
白き敷布のうへに

悲しみにわかれて行かむ匆忙きせうの生活ぞわ  
れをまてるに似たる

いつしかに頬杖つきて眼を伏せぬ水仙ぞ  
にほふたそがるる室むろ

嵐なす頭のなかにあはれなる女の顔の小  
さくただよふ

水の上を遙あかるき悲しみに電車ぞ走る  
木がらしの夜

君によりおしへられける悲しみに別れて  
さらに悲しみをえぬ

蜻蛉をおさへむとする女の手わかき女の  
手のなつかしさ

わが世界君にはみえず魂のふたうまどへ  
る悲しさに生く

ありなしの水仙の香のただよへる暗き座  
敷に君おもひぬる

なにもものわが煩ひとならむ日の日光を  
みるうらなつかしさ

白菊の青きつぼみをにぎり居し君がをさ  
なき兒のなつかしさ

いま一度うなづきてわれにみせよかし言  
葉すくなきさびしき女

弱かりしふみにじられしそのままにあれ  
ばありうるわれなりしかな

戀人を待つおもひしてひかへ刷までばこ  
の日も暮の鐘鳴る

われは唯黙してあらむしづやかに「吾」の  
くへをひとりながめむ

風暗き都會の冬は來りけり歸りて牛乳の  
つめたきを飲む

火の氣なき宿に歸りてくらやみにマチを  
たづぬる指のつめたさ

みづからをいたはることのおろかさにお  
ちなむとするあはれ女よ

新らしき心となりし喜びに思はぬことを  
口ばしりする

乳色のさびしき花をみいでけり君が愁を  
まぎらすによし

遠く來て遠く消え行く葉づれの音つめた  
き床にこほろぎをきく

つかれたる腦に泌みくる白粉のにほひの  
中に瓦斯こもりゐる

やはらかき女の唇の印象のさがたき日  
の心むづらひ

別れ来て外套の襟に顔うづめ橋上に立ち  
冬の川みる

わがままをかたみにつくしつくしたるあ  
との二人の興ざめし顔

古マント茶色の帽子かくてわが悲しみは  
足る人に別れぬる

別れけり彼の値なき陶器のかけらに似た  
る男となりけり

かの別れ久しくなりぬかがやきて遠方に  
あり昔の人は

磯山の沙のぬくみを忘れえずねながらつ  
みし名知らぬ草も

ておひたる獣の如く夜深くさまよひいつ  
る男ありけり

自<sup>じ</sup>棄<sup>す</sup>の涙君がまぶたをながるるや悲しき  
愛にさめはてし頃

別れむとする悲しみにつながれてあへば  
かはゆしすてもかねたる

おごそかに隙子の外<sup>そと</sup>にせまりたる冬の夜  
深しるひざめにけり

あかつきの柱つめたく脊を支ふなかばは  
ねむり物をおもへる

濠<sup>わう</sup>端<sup>たん</sup>の電柱<sup>でんちゆう</sup>にもたれ春の夜の空のしたな  
る人となりけり

あかつきの空をながるる霜あかりねむら  
ぬ人の眼にいたく泌む

君思ひ窓によりつつ牛乳<sup>ちゆうにゅう</sup>を飲むうすあた  
たかき日光を吸ふ

停車場の赤き灯かげに別れ来て濠<sup>わう</sup>端<sup>たん</sup>に立  
ち人をおもへる

君にわかれ町の小坂をのぼるときやや胸  
ぐるし疲れをおぼゆ

みづからをあはれみ、そめし甲斐なさよ酒  
にしたしむことをおもへど

かはきたる空気が部屋にながれたるひと  
りねむれば除つめたし

かへり来てつめたき衣をかふるとき君う  
らめしく思はれてきぬ

をしむなく愛ししゆゑにわがままとなり  
し子なりと君が眼のいふ

たのしまぬ心いだきてかへりけり机の上  
にかしらうづめぬ

うたたねよりさむれば隙子ほのしらみ水  
仙の香の悲しくまよふ

おもひやる亢奮したる悲しみを胸にかか  
へてかへりし女

わが窓の下をうなだれかへり行く男をみ  
なれゆふべをぞまつ

あたたかき汝がだきしめに馴れやすきわ  
れの心をのがさしむるな

こころしてわれを愛せよまもれよとこの  
わがままの男のいひける

去年よりはおしろひなれし君が顔こなた  
によせよくちづけをせむ

日にむかひすぐ立つなる如月の木立の  
もとに物おもひする

濠端の貨物おきばの材木に腰かけて空を  
みる男あり

みづからに愛想づかしのせらるる日君を  
負擔に思ひわづらふ

なにごとを驚くことのまれになり物忘れ  
せしさびしさまさる



君よ許せ此一巻の中にもみつ汝がかなしみの  
おもひでをさへ

われをして多くの歌をよましめし汝が清  
く尊き涙(以上一首、人へ)

以上四十二年  
初秋以後の作

○

しばらくは妻となしても許すべき君をあ  
はれみ溺れそめける

あはれみか愛かなさけか君みれば捨ても  
かねたる歎きのみして

こころみに眼とちみたまへ春の日は四方  
に落つる心地せられむ

少女等はわらひてあればこと足れるさま  
なりあはれ春の一日を

今日もまた夜ふけて歸りよごれたるさび  
しき顔を鏡によする

いつしかに日は中空にかゝりありいでて  
寐たらの顔てらさせぬ

やうやうに才なき吾をみいでしや一人あ  
る日の心もとなさ

かくまでになりし女の心さへ男は悲し容  
るる能はず

眼を口を耳をおほへる人三人脊なかあは  
せに木枯をきく

雪ふれば彷彿として眼にみゆる空のはて  
なる灰色の壁

血を見るにあらずば心飽足らず思はれも  
しつ刺激なき口を

君をえて勝ちし心のわかやかに燃えぬと  
みしはつかの間なりき

海ひろに濁りて死魚ぞただよへるそが中  
にみゆ君が亡骸

許されて行かばや海につめたさに強ふる  
女のつよき戀より

あやまちて君にまことを語りける偽りを  
のみ喜ぶ人に

こはいかに冷たき床ぞ昨日よりひかれし  
ままのうすき蒲團よ

わが胸にその前髪をあてしまま妻となる  
子は泣きねいりする

去年よりは顔もかたちもわが思ふ姿にち  
かく君なりにけり

いかならむ夢をみしやと逢へばまづとひ  
し癖などいままなつかしき

楊子くはへ障子いづれば午ひる近き日ぞまば  
ゆけれつかれし瞳

あるときの喜びをもてつぐのはむすべも  
なきかやこの悲しみを

いつはりの涙なりともにじみ來よ命死ぬ  
べく君の泣けるに

二人をばいかに小さき其胸にはかりてあ  
らむ汝が妹は

眼をとちていつも思ひぬ悲しみに終るが  
如き二人の戀を

おきいづればいたく心のつかれをばこと  
はりもなくおぼえぬる朝

君一人えたる重荷にたへぬやう心をふる  
ふ信あらぬ日を

海あかり渚のかたに砂山をくだりぬここ  
ろ鉛のごとし

涙くだる冬の夜ふけの火もあらぬ冷たき  
部屋にわかれば

みおくりぬ街のほこりにつつまれて遠ざ  
かり行く君が小さき影

あはれなるこの空想兒をば死なしめもえ  
ざりし夢の戀なりしかな

夏のゆふべ<sup>まき</sup>脚<sup>く</sup>のをとこ橋上に仆れて空  
の赤ただれたる

今日もまた夜となり夜もふけにけり冷た  
き唇にわかれてかへる

あまりにもつきまとはるるが煩はしとき  
にはわれを忘れるよかし

いかにしてかくはぐれたる心とはなりに  
けるかと君をながめぬ

君は病む死ぬばかりなる悲しみをわれに  
も強ひて味へといふ

瓦斯ひとつともれる下に君もありわれも  
ありけりふと驚きつ

別れ来て電車に乗れば君が家の障子に夜  
の霧ふるがみゆ

心鋭き君が弟にまもられてままならぬ日  
の腹立たしさよ

ならはしとなりて君みぬ一日の不快にま  
さることあらぬかな

おとなしうわがなすままになれよわが愛  
するものよ柔順の子よ

君をはなれ窓にもたれてたそがれの街を  
みてあり歸らばやと思ふ

なつかしき戀ひしさ去りて残れるはまま  
ならぬ日の口惜しさのみ

ほこり浮く編輯室の古机頬杖つきて君を  
思ひぬ

あまんじて君一人をまもりし日まことす  
くなきわが歎きかな

あぶら淨きし手と手握りてわが友と別れ  
ぬほこり風吹く町に

思ふこといはで終りしそのかみの幼き戀  
に似て胸苦し

わが思ふままならぬとき惜しみのわりな  
くつのるわかき女よ

ほこりあびし疲れし足にゆるびたる下駄  
の鼻緒の心もとなさ

日曜の君來ぬゆふべ何事も望みなきごと  
おもはれもしつ

うつくしき喜びといひ悲しみといひつる  
ひまに陥りにける

飽足らぬ女なるかな熱するといふこと知  
らずただにやさしき

わが電車今宵も君をおきざりに風吹く街  
をよく走るかな

わかれ来てほと息つきぬおのれただひと  
りとなりし心安さに

あはざるに如かじみざるに及ぶなし別れ  
てあらむうみそめし子よ

よそめにはいと幸とみえもせむ心はぐれ  
しかなしき二人

心足らひともなひ來たる倦怠けんたいのあまり長  
きにたへられもせず

わが妻となすに値の乏しきをふと思はれ  
ついかにかしけむ

窓によりて夕となれば笛を吹く妻の弟を  
さびしがりける

わが愛に心足らひて倦みそめしこの我が  
ままの子を如何にせむ



戦ひに似たる思ひのひまもなく心ぞそそ  
る君おもふとき

心足りてありし昨日にかへらむとあがく  
二人のあはれさ思へ

われ愛すとかくは誓ふにおとなしうした  
がふことの出来ぬ女よ

おごそかに隔つるもののあるをおほゆ愛  
すといへど戀ひすといへど

足ずりて泣けど甲斐なしままならぬひろ  
き世界にすむこの二人

すてらるるかすつるかいつれ別れての後  
の思ひを今知らまほし

敵さへときにはなになつかしき思ひす  
なるを君いとふ日よ

時として飽足れるやう思はれしその一日  
の忘れかねつ

かへり行く裾短なる弟のうしろ姿を君と  
ながむる

煤烟のうづまくをみてふと女戀しうなり  
ぬ夕やけの空

なすままになりし昨日の君おもふこの春  
雨の朝こちかな

このままに死なむといひし人はいま言葉  
すくなに歸り行きけり

うすけはひ昨宵のままにてかへりゆくう  
しろ姿のことに眼をひく

なにとなく唯何となく忘れえぬ人のひと  
りとなりし君かな

みなほせど溺れし故にあらじかと思へど  
君は美しくしかりき

あなどりつさげすみつして捨てもえす捨  
てえぬままに可愛ゆくなりぬ

とある夜のめさめしときにかたはらに添  
伏す君のなかれと思ふ

この日より悔いあらためむ君ゆるになか  
ばは生きしわれなりしもの

かへりみて淡く悲しき心地する戦ひてえ  
し君と思へば

さはれ猶可愛ゆきところかぞふればあへ  
て別れもなしがたきかな

つかれたる白粉の香と肌の香と髪の匂ひ  
にたへもせられず

ややしばしさかりてゐよと願へども甲斐  
なき人はわれを忘れず

これのみは悲しきかすに入らざるや別れ  
まほしき子に思はるる

何事も信ずる人をあはれとも飽足らずと  
も思はれて來ぬ

追憶ぞあはれ悲しく残るなりやや黒みたる人の乳のいろ

やや痛きこころをおぼゆつかれたる額にさしくる夏の日のかけ

かはゆさに餘りてなるや故もなく君を惜むに心つかれぬ

いさかひの後にのこれる哀愁にしたしみやすきゆふべにもあるかな

しばし前憎しと口も利かざりしおなじき人のいとほしさかな

世の常の女と君はなりしかや來しかたをのみよく責むるなり

歡樂のはてにまつなる寂しさに今日ひとりしてゆきあひにけり

捨てらるるそのうら安さ願へどもまてども君はうみあきもせず

わが女われより外に戀ひし人なかれと祈  
る信なき日なり

あたらしき心の刺激もとめつつうごめく  
蟲に似て今日もあり

眼をとちつみだれし心しづめえずわが生  
活の路のはておもふ

うすぐもり光れる空の一面にゆきわたる  
たる淡き悲しみ

感覺の鈍うなりしを切に知り心さびしく  
市をさまよふ

弟の家を走りて來りしをつれかへりゆく  
父のうしろかげ

いかにして男の誇きづつけすあらむ悲し  
き意識の戀よ

戀をすて世の常人つねびとの生活に入る日近しと  
知りそめしかな

女多きうからの中に生ひたちしわが軟弱  
をわれと罵る

わかき日を葬れ膜をへだてみし世界のさ  
まのやや變りきぬ

へだたりのいくばくなるを知らねども父  
おもふときさびしうなりぬ

君は泣くしづかに夏のたそがれの青葉の  
色のしづみゆくとき

にくしとは思へず君が泣くみては心はな  
はだ静なれども

海の日赤ただれたる懸崖に立ちし心を  
君に教へむ

雲光るとあるゆふへの別れなど窓による  
たびおもひいでぬる

ただわれを信せよといへど君は泣くわれ  
また涙さそはれて來ぬ

悲しみにうすく濁りし君が眼のしばしま  
ともにわれをみるかな

名も知らぬ花にむかひてしばしありこの  
みづからをあはれむ心

死ぬばかり思ひつかれし君が皮膚灰白み  
しが悲しかりけり

そちむきに手枕なしてすすりなきぬる子  
よわれを憎しと思ふや

誰が罪ぞわが言葉みな信じえぬ悲しき君  
となし終りしは

悲しみを忘れむとして鎌倉の海にのがれ  
し君かへり來す

秋來たり九月となればこの心ゆるすとい  
ひし人はるかなり

わが胸のこの悲しみをわかつべき君は海  
よりいつ歸り來む

海の日の色づきし君が頬のあたりわづかに  
昨の悲しみみゆる

以上四十二年初春  
より新秋までの作

○

つかれはてつめたき夜の灯のもとに横は  
る時君おもひいづ

夫捨てゝ來しと戸をうつ君をのみ危み風  
の夜をいねすなり

うれひつつ小坂のぼりぬつぐみたる唇に  
つめたき血をおぼえつつ



をさなかりし日の驚きに海をみし心を君  
よ失はずあれ

あゝ君は逃げし鳥なり嘴赤き海の鳥より  
賢なりしかな

此二人つなげるものの涙にはあらしと知  
りし心さもしさ

さびしさに追はるる如く戸をいでて明る  
き街の灯にてらされし

偽れるわれをみいでしさびしさやまこと  
なりきと思へるなかに

俤く<sup>くま</sup>だり冷たき秋の街をゆく心いささか  
飢えをおぼえて

来しかたも来しかたも亦美しくしき偽りな  
りきうら若き日の

つまづきし心のいたで幾日してわづかに  
君をえていえにける

君をのみ思はぬ罪かわれのみの君にあら  
じと知りし此頃

耳にふとあつれば石も聲たててなげくに  
似たり悲しきゆふべ

君が唇聞のなかにもみゆるほどあかかり  
し夜の強きくちづけ

わが前にひとすぢ匂ふ秋の灯よ遠灘の音  
よわれをあはれめ

低き岡にひとり野ばらの香をかぎて君を  
まつこと十日となりぬ

冷えし夜の沙に仆れしそのままにひとと  
きありぬ海よとらすや

汚れたるこの美しくしさ幾日してかくなり  
しかや君知りしより

あはれなる君が匂へる眼の色よやすさ  
みたる心のみゆる

このわれをあはれめ夜の空わたる雁は灯  
はきえなむとする

水を見てながるる水を見てありぬ一日は  
かくてありもえしかな

ああ醒めてひとりかくありたらはざる此  
一日もゆふべとなりぬ

夜の海懸ざめし子をいたはりて暗きかた  
へに夜もすがら鳴れ

日の樹立あはれや顔を白き手におほひて  
泣ける君をみしかな

今日も亦親をわすれに來たりしとあはれ  
や君はいたく泣くかな

遂にゆくところなき身のうしろより夕ぞ  
せまる街のどよめき

ひたと噤む夜の時計をみあげたる瞳さび  
しきひとりの父よ

何故に生きてあるやも思はずに唯生きて  
ありその日その日を

渴きたる心の上になづくべき悲しみもな  
き秋の一日

わが友よ迭みに今日も投げやりの心をい  
だき街さまよはむ

偽れる吾をまもりて辛うじてこの不安な  
る一日おくりぬ

同じ道ともに手とりて來し友をおとし  
れぬと誇る人あり

夜の街つめたき眼して電車まつあまたの  
人の脊に立ちしかな

林檎かみぬ十月の朝庭の木の風鳴るをき  
き柱によりて

灯ともさぬ睡つかれし夕間暮このかなし  
みを誰にうつさむ

今日も亦わづかに生きてありけりとつか  
れたる身を夜の床におく

暮秋の竹の林にわれたちぬ脊をながれた  
る冷たき夕日

ふとしたる出来心もて何事もなし來たり  
ける昨きのを咀はむ

唯さびし妻ほしきにはあらじかしかくわ  
が心いひときすれど

われ一人となりぬわが友父となり或は母  
となりける後に

なりはひをいそしむ人の足輕るさあわ  
れひとり今日もさまよふ

赤き灯をあかるき聲をあとにしてけがさ  
れぬ身のがれ來しかな

わが知れる人のかぎりの名をかぞへ忘れ  
でありしよるこばしさよ

今も猶君と祈りし秋の夜の卓の冷たさえ  
わすれずあり

冬來たるほしひまなる心さへややいた  
みをばおぼえぬるかな

妹とすべきか妻となすべきか若き一人を  
えてまどひけり

若き子よ妻とよばれむ願ひの日まてるが  
よくも眼にみゆるかな

ひともとの木立夕日にかがやきてさびし  
きほどに瞳あかるし

木枯よ空にただよふ白き日よ目とちてわ  
れは俤にありぬ

いかにして家鴨は啼くや暗き町この冬の  
夜をくくみごゑして

月曜のつめたき朝となりにけりほしひま  
まなる二日はすぎて

遠灘の悲しき音よねむらむととぢたる眼  
より涙ながれぬ

冬深き夜の街よりかへり来て小さき火鉢  
の火をひとりふく

以上四十一年初秋  
より歳晩までの作

收 穫

下 卷

吾悲しすべての人の性をもつうらわかき  
日に君を戀ひして

秋は來ぬ犯さぬ罪のむくゐなるこの淋し  
さをいかにすべしや



川ひとすぢあかすながるるみてあればみ  
てあるほどに君戀ひまさる

香として山鳴空へ消え行きぬとりしまま  
なる君とわが手よ

もの思はぬ心のさまと物おもひつかれば  
てにしさまと相似る

ある時のある人われに偽りをいと安げに  
も語りけるかな

雁わたる夜空あかるしここにして三國は  
いづら秋の風吹く

夜の花ふるへて咲けり月光の低う垂れた  
る二月の家に

人すてし後の思ひをいとせちに知らまほ  
しさや行く春の宵

紅塵の中に一人の君住めり都の春の日の  
暮れおそき

君は泣く悲しき故か泣くことのうれしき  
かそも君いたく泣く

晝と夜のさかひに咲ける花遠くたづぬる  
や君心つかれて

大風の森こそうかべ夜のはてに人戀ふる  
眼の空にむかふとき

春深し山には山の花咲きぬ人うらわかき  
母とはなりて

君生れし日吾はや君を戀ふるべく母の乳  
吸ひて相摸にありき

途に二人相踏まざりし路百里君が墓まで  
長うつづける

路百里ふたたび秋はめぐり來ぬ吾等二人  
に鳴る鐘もなし

しづか、しづか、しづかは君が名なりきと思  
ふにまたも泣かれぬるかな

風風ぎぬ途にいふべきこといはで別れし  
如き心地するかな

君たづねてわか魂まよふ又の世の眼にこ  
そうつれ初秋の空

來む世にもやさしかれとてふと君は死に  
ぬかへらす秋又めぐる

君は死にき君に代りてこの吾を思ふ子あ  
りや日は秋となる

暗きより光をながむ別れよりまたあふこ  
とをおもふごとくに

月あかし山風ぎわたり秋草のにはひただ  
よひ君思はする

洲に光る蟲あり青き糸ひきぬ君と相見る  
高草の中

秋の花うすき光の上はしる夕となりぬ待  
つ人となる

わが故郷君が爲めにはなつかしきまだ見ぬ國の相摸よ悲し

耳鳴りも今宵はうれし君が歌いつしかくちにのぼりけるかな

行くべかりし君と二人の長岡にみぞれする夜か悲しからずや

三國越えて越に入る日の吾おもひ涙あたらし十一日よ

風秋となりて心は水溜れし沼へかよへる路をのみ思ふ

秋草の小さき實とびて我が前におちしとをどる君思ふ胸

月あかし山風ぎわたり秋草のにほひただよひ君思はする

十九にて君は死にきと葉櫻のかげにたちより皐月を思ふ

胸はつとせまりぬ顔に手おくまに涙あや  
なく涙をさそふ

さびしさに心ふるへてありし日は尊かり  
けり吾現實に倦む

夜よの祈いの禱のをはりし後のちに二人みてさびしく  
るみぬ秋雨のふる

わがあらぬ相摸に心遠くさし戀ふるや君  
は秋の日の前

日の下に夢みる如き眼をあげて青き小い  
さき蛇われをみる

山みれば山海みれば海をのみおもふごと  
くに君をのみ思ふ

胸あかう血ぬりて君を追ふ夢の來たれあ  
まりに心足らふ日

君をみるわが眼昔にことならず悲しから  
すや君は老いたり

かへりみてわが爲め世をばあやまちし少  
女あふぬにさびしうなりぬ

世はめぐる別れし人は又あひぬ面變りし  
て昔を語る

死別こゝに生別を兼ね見ぬ人は死してあ  
りけり百里の彼方

静とは冷たき碑にさざむ名にあらじあ  
すと足すり泣けど

油吸ふ秋の灯のふと耳にのこりてその夜  
悲しかりけり

君に行く悲しき一路吾踏みて今ここに  
り夜の鐘をさく

神よこのはしためは泣く憎しともはたあ  
はれともさばきしたまへ

馬といふ獸は悲し闇深き巷の路にうなだ  
れてぬ

泣き泣きてつかれはてたる人に似る海は  
夕日に風ぎぬしづかに

翼おさめくぐみ聲して空をみる秋の小鳥  
を君とながめぬ

一の吾君をえたりとこをどりす二のわれ  
さめて沈みはてたる

雁啼くやまたも悔い泣く日となりぬ獸と  
人の間にまよひて

日は草におちぬ遠野の岡の上小さくかが  
やき君たてるとき

泡立ちて海よ眞白に日の下に小さいさうな  
りてわが夢に入れ

高き木に熟れし木の實をあふぎみて心足  
らひに二人ありし日

死して猶われをみるべきそらだのめひと  
つをたのみ君は死にける

呪ふべくいつくしむべくなつかしき相摸  
はわれの故郷なりき

凋落の相摸よ山は火を噴かすうらわかき  
子の母に日暮るる

いひしらぬあるものわれをもてあそぶ心  
地おぼゆる君にむかへば

鐘の鳴る相摸の國はみえもせじかくなげ  
きつつ死にし君かや

君をのみ偽るかすの加はりてまづしくな  
りしわが心かな

塚おほき相摸は悲ししめりたる枯草の香  
にうす明りして

冬の海傾きて鳴る日の下に暗憺としてゆ  
ふべにいたる

以上四十年秋以前の作



小野の路有明行けばそのかみの海なりし  
日の潮の香ぞする

阜月の海飛魚するなるはれやかのみ  
ゆ朝の市場にたてば

初夏のにはひ若葉にうるほひてやうく  
おもし胸の思ひは

幹青う風風ざわたる水無月の落葉松山に  
海みてある日

沖をみて陸なる人等手をあげぬこの幻よ  
眼路にかかれる

月夜鴉さはにわたれり八月の海につづけ  
る高原の國

小行燈の菜種油のつきし夜の前髪ぬらし  
泣きし子おもほゆ

阜月來ぬわかき心は物の香に青波さわぐ  
海をこそおもへ

鐘しきりに行く春の野の寺に鳴る母なき  
人の母となれる日

夜の空に鐘鳴る、街は死せるごと風ぎたり  
君はわが前に泣く

はてしなくかかるおもひの君にのみたぐ  
られをらば命死ぬべし

青みたる春の木の子に似るものもなきな  
つかしきふとおぼえける

遠鳴の風山越えていと遙に風ぎたるあと  
の氣の衰へよ

春の雨おもひまけては力なく涙ぐみつつ  
うたたねもしぬ

心せちに刻むとしては忘れたるおもかけ  
ありとうべなはずけり

人ふたり一人は失せぬいま一人失せたる  
人にけおとりはせで

ややありて君はうるめる眼をあげぬ物い  
ふとしてまたうなだれぬ

人わかず戀ふれば人もわれをまた思ふに  
似たるこの春の日よ

うら安き思ひしづかにひろごりて愁をつ  
つみ涙ぐましむ

風空の濁れる色をみてや泣く國のけてな  
る別れにし子よ

いかならむ夢みてありや半眼はんまなに君は眠れ  
り春のあけぼの

雲はだらにとぶなり焼けし北國の山と晴  
れたる空とのなかを

みてあれば霞みて近くほのあかく日はあ  
たたかう我が胸にしむ

白<sup>しら</sup>檠<sup>えい</sup>の夜空あかるし風遠く風ぎて一樹の  
かげ黒き街

山しづかに秋の夜あけぬいづこともわか  
ざるほどの空<sup>そら</sup>鳴<sup>な</sup>りしては

路ひとすぢ小野の胡桃の木かげよりつづ  
きて遠し悲しからずや

日の前に二人は泣けり美しくしう指をなが  
れて涙ぞくだる

神よ許せ飢えし心のあさましう物あさり  
するこの若き子を

君が手にわが手かさねつ思ふこといはす  
別れて久<sup>ひさ</sup>になりしよ

夜<sup>よ</sup>の空あかるきかたに別れける君ありと  
しもそらだのめけり

月夜鴉啼きつれ越ゆる草山の古りたる鐘  
に月かたむきぬ

いましづに君が手とりぬいつの日かとり  
なれしたる心地おぼゆる

若き日にふたたび君をえしといふよろこ  
びありてすすりなかるる

風あかるう夜の空を吹く疲れたる心は君  
を思ひうかべぬ

夜は深し相對ひゐて物いはす別れまほし  
くなりし秋かな

日光のあかるき家に君住むと昨日の如く  
今日も思ひぬ

初秋の空吹く風の眼にみえてわが胸涼し  
君を思へば

青き花たづねて遠き水無月の夕日の小野  
に魂はまよへり

君が帯緋葵の花ほどになりわが眼にうつ  
る小野の別れよ

水白き小野をよぎりて古寺へ歎さそふか  
遠ほととぎす

物憂げにわれをみる眼のはたらかずうる  
ほひてありいかにせし君

八月の街道長に裏白の柳は立てり倦み果  
てし晝

ひともとの白玉椿下かげに物おもふべく  
ひとりすむ日よ

初夏のあかるき街を君と行くわかるる前  
のこちおぼえて

失ひし物あるに似てさびしさをおぼえそ  
めぬる日とおもへ君

われしらす淋しうなりて涙しぬこのとき  
君は忘れてあらむ

をさなかりし春の夜なりきわれを脊に梨  
の花ふむ母をみしかな

何となき心だのめや春の鳥来てはなくな  
り如月立つ日

116

おもふことありとしもなき春の夜を驚よ  
いづくへ音をたてわたる

ほととぎす去年ありし人今日あらず阜月  
をかほるたちばなの花

以上四十年夏以前の作

○

ああ相摸妻となる子のわが母と語るがみ  
ゆる秋の日の前

いたまじさわかき心のおとろへを知らず  
遠くも君追ひてゆく

人妻となりける人のおとろへし睡の色を  
思ふ秋の日

117

かへられし君が名書きて筆なれぬなげき  
に暮れぬ秋のひと日は

118

わが手かへて書く悲しさよ人妻のもとへ  
やるべき秋の夜の文

君が兒の泣きこゑふともきこえずや相摸  
はわづか十八里なり

君が血潮いとわかやかにうけし子をひと  
眼みせずやははれ人妻

人妻よまた救はれぬ生涯に入ると歎くか  
兒をいだきては

夫捨てて兒を捨てて來よあはれこの心火  
に似て君戀ふ我れに

明日を追ふ心は若し妻となり母となり  
し君戀ひつつも

すかせども君はかへらず唯泣きて路の遠  
きをあと追ひてくる

119



夜となりぬ遠鳴る波に弱き子の祈るがま  
たも眼に見ゆるかな

ややに倦むややに涙はかはさくるややに  
思ひは君をはなるる

啼きもせず飛ばむともせず空をのみあふ  
ぐ鳥あり磯山の上

われさびしさびしきゆゑを知るからにあ  
さましうなり君をおそれぬ

人戀ふる血潮はわかき男のみうけしや春  
の夜をひとりぬる

残れるは苦き悔のみ二人してまたかへり  
行くさびしきいざ一路

大鳥よ空わたる時何おもふ春の光をあ双の  
眼にして

濁りたる海原みゆるその上を一羽の鳥の  
行くが悲しき

大鳥の瞳しづかにとづるさま思ひいつし  
か我れも眠りぬ

顔あまた暗きかたへにわれをみる死なる  
一語をふと思ふとき

うら悲し老いたる野馬の双<sup>まが</sup>眼に衰へみゆ  
る木枯の日よ

われ眠りぬ暗きかたへに木枯のつかれし  
聲を遠くききては

君が名よ我より前<sup>まへ</sup>に呼びなれし子ありや  
と思ひ涙はしりぬ

われのごと小さき愁にとらはれてあるか  
や箱の秋の木の實よ

一老樹日にむかひ立つしづけさの白<sup>しろ</sup>晝<sup>ひる</sup>を  
思へ君よわが手に

黄なる海唯渺たるに涙まづ走る心は君を  
さかれる

薄命のすぢ掌にきざまれてありやと冬の  
灯のもとにみる

人走る逃れしものを追ふごとく木枯の夜  
の冷たき街を

姉妹の母が生みたるこの二人戀ふるとす  
ればまづ歎きあり

あはれ日は歎きにかけぬ涙して青き果食  
らふ人のさまみゆ

われ弱しされども君につくられし性と思  
へばうらまれぬかな

海とろに濁りて赤しわれひとり親も思は  
ず渚に立てる

明日も亦人戀ふる日にわれさめむ山に花  
咲く水無月の日よ

大空は風濁りなし果てもなく浩蕩として  
歎きに暮れぬ

○  
忘るるもいささか惜しきこともなき悲し  
き人を捨てもかねたる

わがものとなるときとみに物足らぬ人を  
あはれみこの日にいたる

花あかるう日にむかひ咲くさまおもひわ  
が眼をとぢぬ阜月に入る夜

死にし子よ許せいままた君に似る人あり  
われを戀ひてやまぬに

醜さを忘れて人を戀ひしうる喜ばしさに  
似る悲しさよ

相摸より一縷ひとの光われにさすこちし君  
を都におもふ

よろこびをおさへて君にむかふ日の物か  
げもなき春の夜の家

何となき心の老いをおぼゆる日忘れてあ  
りし子を思ひいづ

わが性さがに早くもうつる人をみて捨つる心  
のふときざしける

いひしれの醜みにくきうちに美しくしきひとつを  
みいで君を戀ふる日

夜は深し愕おどろ然としてわれとわがかくして  
あるにおどろきさめぬ

ああ君は住む胸もなきさびしさを語るか  
涙かはきし眼もて

衣きかづきて人はねむれりかよわなる心に  
おもき愁をおきて

わがもたぬ性さがのひとつを君にふとみいで  
てつひに忘れえずなりぬ

梢たがひみな明るう照れり小鳥等の巢をくひて  
なくひともとの野木

卵ひとつありき恐怖につつまれて光冷た  
き小皿のなかに

若竹は皐月の家をうらわかき悲しみをも  
てかこみぬるかな

枯草にかしら埋めて恐怖をば忘れむとす  
や悲しき小鳥

君が眼よはじめてわれをみしやうに喜を  
もてかがやきてあれ

いくとせか君にいふべき言の葉をつつめ  
る胸をいだきてはぬる

春の鳥あかるさねしてかろらかに心を遠  
き昔にさそふ

鳥は空にうたへりわれはふるさとにかへ  
らむとする日に似たるかな

唯々として君はうなづくああ弱き人なる  
かなや我れは倦みたり

二重<sup>ふたへ</sup>險<sup>まはた</sup>さびしき君はかたへにて物<sup>もの</sup>縫<sup>ぬ</sup>ふ夜  
なりこほろぎの啼<sup>な</sup>く

空へゆく悲しき心海へ行くさびしきこ  
ろやりどころなし

冷笑のなかにかなしきほほるみのふとし  
もまじる君おもふとき

暗きより人よぶ海のかなたより人よぶ如  
し冬の夜ふけぬ

日の前に小鳥うたひて平隱にこの一日は  
すぎにけるかな

今鳴るは二時かも心やうく<sup>く</sup>にさびしき  
われをみいでてさめぬ

かぞへてもかぞへてもまた我が指のかず  
おなじきがさびしうなりぬ

くせづきし唇さびし別れては日の色をの  
み夢みぬるかな

杳として春の日照てりわれ知らず腫しづ  
かにうるほひて來ぬ

夕來たる遠きよりはたとほきより別れて  
あればなつかしきかな

母は子を灯あかるきわが前によびぬさび  
しさをたへがたしとて

さびしさにそと戸をいでぬめざめたるそ  
の瞬間の母のまなざし

妹をそとさしまねき母はいま呼吸したま  
ふやうかがひてみよ

病める魂濁れる空に小鳥ゆくそのさびし  
さを今日も思ひぬ

あやまちてとりし人の手くちづけし人の  
手あまた夜の夢に入る

君が齢かたむきそめし悲しさをまのあた  
りみて此十日へぬ



誰ぞやわが力にたへぬ人ありて涙をしゆ  
る此行く春を

倦むに早くうつらふにまた早きわが性を  
悲しむ春暮るる宵

誰ぞや来たれ誰ぞや来たりにいたはれよ  
かく思ふことしきりなりける

「わが思ふ子ならず君は幾人にこのかなし  
みをくりかへしける

なげき淡く残りてこころつつめるが雨の  
朝などなつかしきかな

父の前われはも君が子ならずといひうる  
ごときはげしき歎き

夏來ればはやくも秋を感じうるこの心も  
て君をこそおもへ

みどりさわぐ眞晝の林ひとところまらう  
明るき光おちたり

親の愛ことはりもなく批をうちてなほあ  
きたらず子は思ふなり

山ふたつ遠くむかへるさびしさに心とら  
るるゆふべくよ

今朝もまたさめぬ都會の壓迫を弱き心は  
いたく感じて

卵黄のはなたれてある小さき皿それをな  
がめるぬ熱あるゆふべ

古き靴裏かへりあり母近きしその日に似  
たる厨のゆふべ

心さびしはげし父の冷語をば厨のかたに  
さく秋の朝

心うみぬこのさびしさをわかつべき人な  
きゆふべ秋風の吹く

悲しみの眼と眼かはして口固くつぐむに  
似たる夜の山山

卓上の小さいき塵のけざやかに眼にみゆ  
人に別れしあした

われひとり眠りにいると思ふ夜のおぼつ  
かなさや海遠くなる

日は稍々にかたむきそめぬ遠木立烟れり  
母の脈たへし時

母の手のぬくみじづかに去りゆきしその  
終りまでとりてありしよ

何としもなづけられざる悲しみを君にお  
ぼゆる相見けるより

わが言葉みなうなづかむ君とおもひいふ  
べきこともいはで終りぬ

ひそやかにわれをうかがふ悲しみの目あ  
るに似たる露つめたき日

ひとところ月の光のおつるごと明るし夜  
のはてしなき海

昏睡に入りしかなしき母の面ながむる子  
等に父もまじりぬ

人妻のすさみたる手をおもふだに涙ぞ走  
る風吹くゆふべ

啼かぬ鳥さはにわたれる暗き空おもひう  
かべぬのこされし子は

以上四十年秋より  
四十一年晩夏迄の作

明治四十三年三月廿三日印刷  
明治四十三年三月廿五日發行

定價金五拾五錢

不許複製  
(付奥種收)

著者兼  
發行者 前田洋三

東京市麹町區飯田町三丁目二十六番地

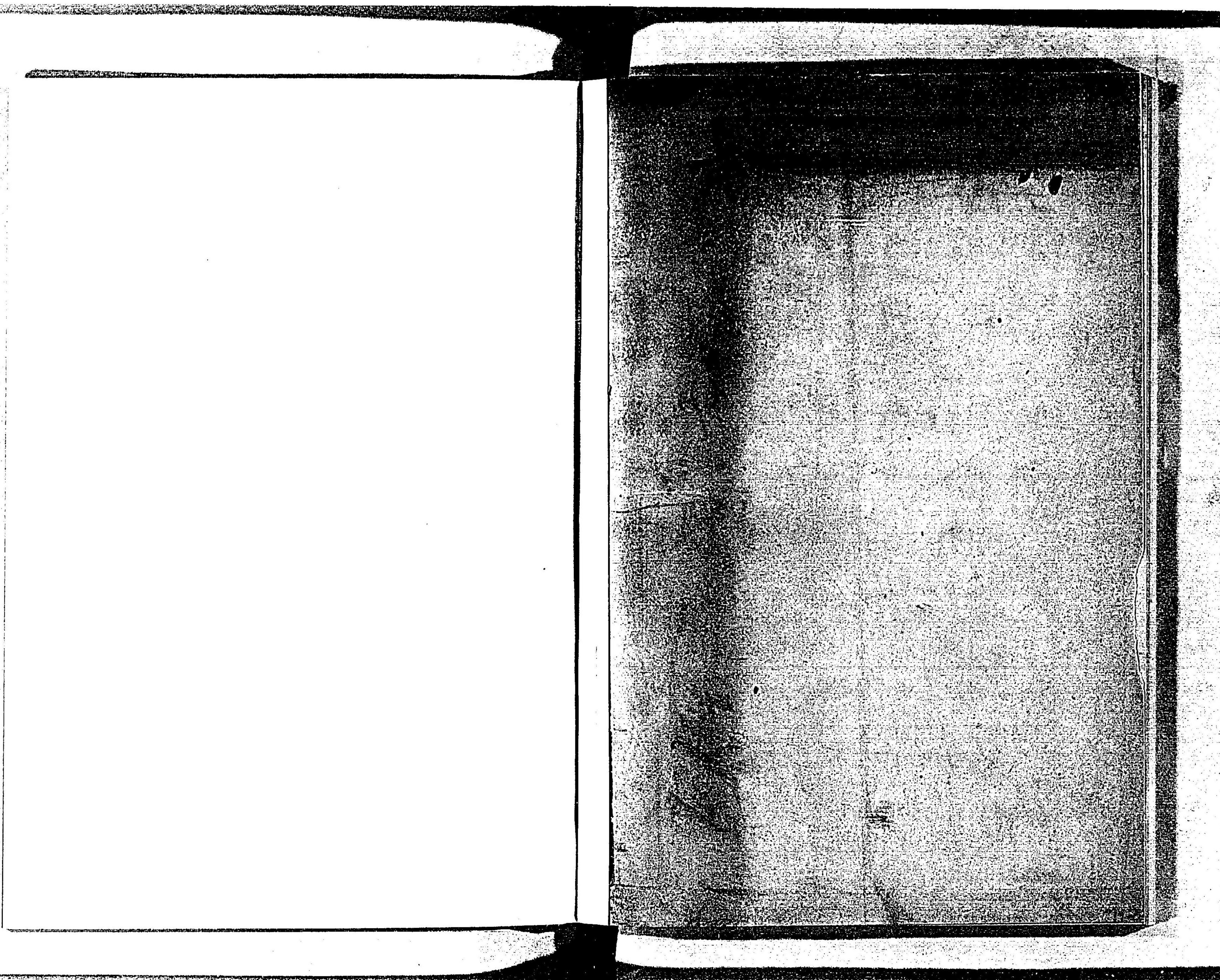
印刷者 山田英二

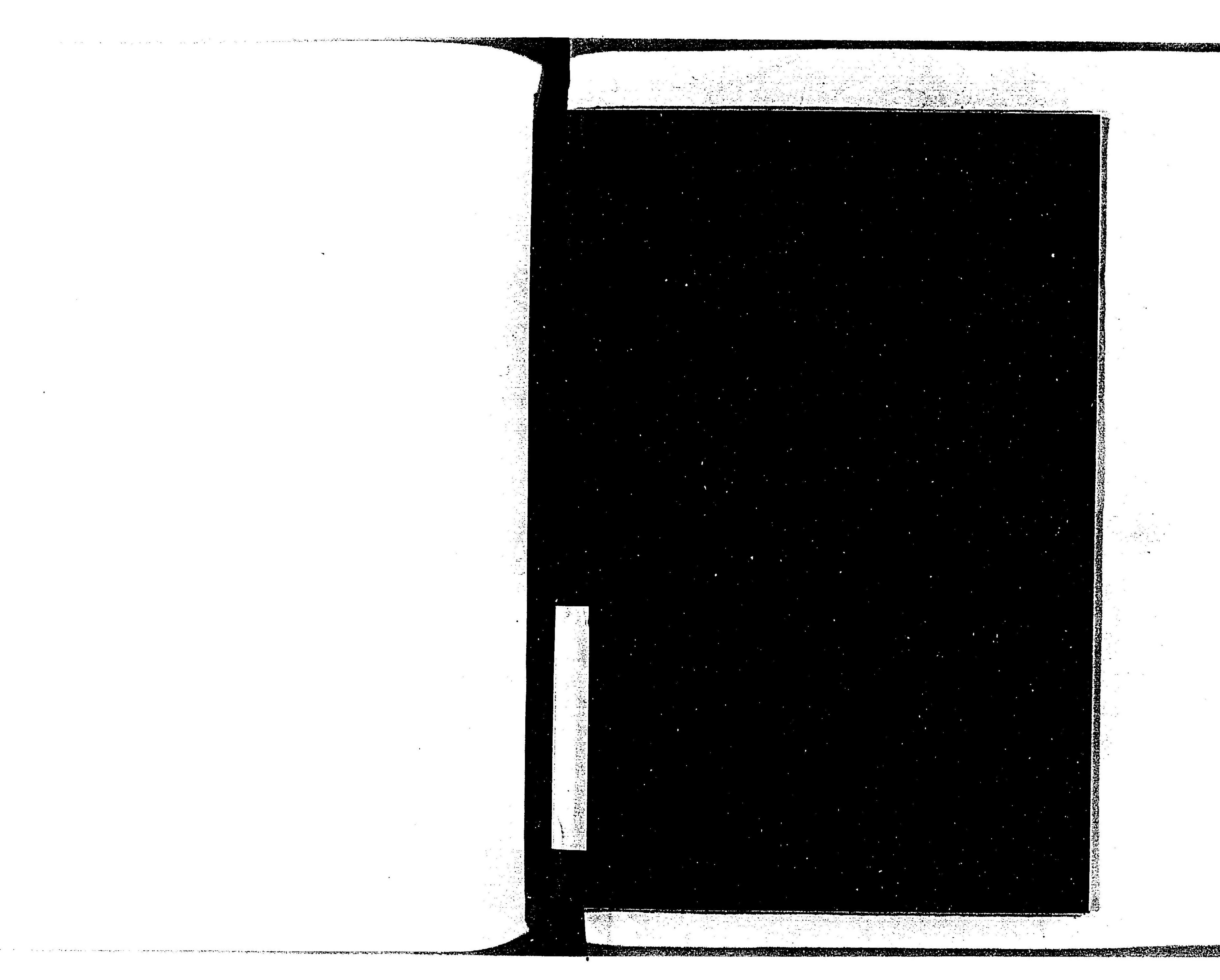
發兌元

東京市麹町區飯田町六丁目  
(振替口座二二〇三四番)

易風社

257-1092





特 22

35

収 穫

国立国会図書館

086087-000-5

特 22-35

収穫

前田 夕暮 / 著

M43

DBD-0780





